

# いにしへの松本探訪 松本旧町名碑マップ



筑摩県博覧会録絵



松本市立博物館

## 城下町松本の形成

### ■城下町松本の成り立ち

松本の地は古くから畿内と東国を結ぶ交通の要衝で、平安時代には国府がおかれ信濃国の政治の中心地となり、優れた文化がいち早く伝えられていました。鎌倉時代には小笠原氏が信濃の守護として進出していました。

戦国時代には、武田氏の支配を経て、天正10年(1582)に小笠原貞慶が「深志」を「松本」と改め、城下町整備に着手しました。天正18年に豊臣秀吉の命により石川数正・康長父子が赴き、康長は天守造営(1593~94)と城郭経営、城下町造りを進めました。

城下町は天守を取り囲く三重の堀の外側、善光寺街道沿いに町人町(親町三町・枝町十町・二十四小路)があり、その周辺に寺社が配置されるなどの町割り計画が行われ、水野氏時代の享保年間(1716~35)まで、約150年かけて完成しました。



### ■五つの街道と城下町の繁栄

「松本城下」の町広く、大通り十三街、町数凡四十八丁、商家軒をなべ当国第一の都会にて、信符と称す、相伝牛馬の荷物一日千駄取入て、また千駄取送るとぞ、実に繁昌の地也! (『善光寺道名所図会』天保14年・1843完成)のとおり、松本は多くの街道が交わり、中馬などの物資輸送の拠点であり、宿場町として大勢の人や文化、情報が行き交う信濃国一番の繁栄ぶりでした。

善光寺参拝の人々に利用され、物資や文化の交流に重要な「善光寺街道」、岡田町を通り保福寺峠を越えて上田から江戸に向かう「保福寺街道」、野麦峠を越えて飛騨に入る「野麦街道」、糸川川までの「塩の道」でなじみ深い「千国街道」、松本と塩尻間の高鳥藩五千石の地域を通る「五千石街道」が、松本藩領を通る主な五つの街道でした。

また、水上輸送として松本と信州新町までを結ぶ犀川船船は、天保3年(1832)から始まり、昭和12年(1937)の国道整備まで続きました。この船便は、犀川から女鳥羽川に入り新橋(白坂)まで乗り入れ、一度にたくさん荷物を運べる強みを生かしていました。上りは糶・麻・塩・薪炭など、松本からは米穀類・蚕・苧・綿・油粕・押絵漆・竹細工などが運ばれていました。

町家中心の城下町は、商品流通の拡大とともに財力を蓄えた商家が力を発揮するようになりました。松本藩の藩主は7代23人で、幕末期の町人口は約15,000人、筑摩郡と安曇郡の藩領全体では約12万人でした。この地域、いわゆる旧松本藩領には今でも似かよった文化が伝わっています。



犀川通船白坂船場

## 江戸時代から伝わる文化

### 【城下町の繁栄】

265年も続いた江戸時代は戦いのない比較的安泰で庶民の文化が栄えた時代でした。城下町松本は、松本藩の中心地で交通の要所でもあり、信濃国一番の商都でもありました。苧・麻・紙などの特産物は全国に販売され、本町・中町には様々な問屋や商店が軒を連ね、東町は旅館屋が建ち並んで賑わいをみせていました。また、豊富な湧き水を利用した紙漉き・紺屋(染物)・酒屋・豆腐屋・味噌屋などが多数ありました。市内には今も名残をとどめる文化が続いています。

### 【受け継ぎ伝えたい文化】



**天神祭り**  
深志神社の例祭・天神祭りは、松本の夏を代表する祭典です。16回会の舞台は、城下町の繁栄を祈り人々の誇りと心意気を示され、宵祭りに境内に引込まれます。舞台保存会により舞台の修復はもとより、舞台椅子などの伝承もなされています。(松本市重要有形民俗文化財)



**あめぐみ**  
「駒に塩を運ぶ」の故事に基づき、正月の始めに塩や給が売られたのが始まりといわれます。各町内で市神様を祀り、現代でも子どもたちが出店を作ってダルマや絵を売る松本の冬の風物詩です。

### 子どもの行事



**ほんぼん**  
先祖の霊を慰める行事といわれ、女の子たちが先づ花を飾り浴衣で提灯を手にして、「ほんぼんども今日明日ばかり」と歌いながら町内を歩きます。「三九郎」という呼び名は松本地方独特のもので、この火で福玉を焼いて食べる慶を病まないといわれます。



**三九郎**  
正月の松飾りを集め、豊作や無病無災などを祈る行事です。節子の成長を祈って贈られた人形を飾り、遊樂のほかに、船ややぶをまじしたホウウを供え、食べます。現在、月遅れの七夕の季節になると、中心市街地の商店前には多くの七夕人形が飾られ、新たな年中行事が生まれています。

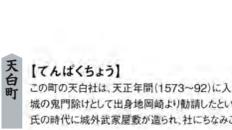


**七夕人形**  
旧松本町の七夕行事の特色は、七夕人形を飾ることです。節子の成長を祈って贈られた人形を飾り、遊樂のほかに、船ややぶをまじしたホウウを供え、食べます。現在、月遅れの七夕の季節になると、中心市街地の商店前には多くの七夕人形が飾られ、新たな年中行事が生まれています。

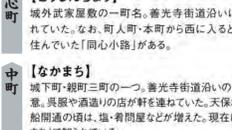
### 工芸



**松本手まり**  
江戸時代に松本藩の武家子女を中心に身近な玩具として手作りされたのが始まりといわれています。木製の糸で球形の作りで、現代でも子どもたちが遊ぶのが人気です。現在、松本の土産品として人気があります。



**押絵籠**  
押絵籠は江戸時代に全国各地で作られました。松本では江戸時代末期頃に武家の子女が作り始められました。明治に入ると、松本の特色品として知られるほど制作が盛んになりました。現在、松本の土産品として人気があります。



**みすず細工**  
すず竹(篠竹)を編んで作る生活用品で、かつては松本地方の特産品として明治30年代にピークを迎えました。生産者の多くは高鳥藩の農家で、行先・文楽・舟車などが作られ、製品の7割近く輸出されています。



**七夕人形**  
旧松本町の七夕行事の特色は、七夕人形を飾ることです。節子の成長を祈って贈られた人形を飾り、遊樂のほかに、船ややぶをまじしたホウウを供え、食べます。現在、月遅れの七夕の季節になると、中心市街地の商店前には多くの七夕人形が飾られ、新たな年中行事が生まれています。



**七夕人形**  
旧松本町の七夕行事の特色は、七夕人形を飾ることです。節子の成長を祈って贈られた人形を飾り、遊樂のほかに、船ややぶをまじしたホウウを供え、食べます。現在、月遅れの七夕の季節になると、中心市街地の商店前には多くの七夕人形が飾られ、新たな年中行事が生まれています。



**七夕人形**  
旧松本町の七夕行事の特色は、七夕人形を飾ることです。節子の成長を祈って贈られた人形を飾り、遊樂のほかに、船ややぶをまじしたホウウを供え、食べます。現在、月遅れの七夕の季節になると、中心市街地の商店前には多くの七夕人形が飾られ、新たな年中行事が生まれています。

## 江戸時代末期の町名

- 【あおいのはは】**  
城下三の堀にあたる築馬場にちなむ町名で、騎馬の修練が行われていた。戸田氏の藩祖康長が藩の家康から与えられた紋章の「葵」をこの地に植えたことがその名の由来という。
- 【あげつち(まち)**  
松本城東門前の堀のまを上げたところから町名となった武家屋敷地。戦後は活動写真、洋書・菓子店、デパートなど、松本一の繁華街だった。大正時代の特徴ある建物が残っている。
- 【いいたち】**  
町人町・中町の枝町。慶長18年(1613)に城主小笠原康政が飯田より入部した際、飯田から来た侍衆や奉公人・職人をあいたため、享保年頃には物師・紺屋・石屋・絹屋などの職人が住んでいた。
- 【いずみまち】**  
町人町・東町の北に枝・枝町。成り立ちは天正13年(1585)頃のさい町。由来は清水が湧き出たからも、食品と衆とい人が住んでいたからともいわれる。家数も多く職人町として栄えた。
- 【いせまち】**  
町人町・本町の枝町。城下西の出入り口にあたり、十王堂がおかれている。由来は天正年間(1573~92)に小笠原氏が本宗正親の伊勢参宮をこの地に移したため、野麦街道の起点として古くからの商業地であった。
- 【うらごうじ】**  
東町大橋から大手橋(千歳橋)までの女鳥羽川左岸で、中町の裏にもたると。天保3年(1832)犀川通船の運航により日本海の海産物が運ばれるようになった。通いはり魚などが軒を並べた。
- 【えさしまち】**  
城下の東の出入り口のため、十王堂と木戸がおかれ町番がいた。百姓や町人はこの木戸から町番は認められなかった。町名は、藩主の御(小鳥)を差し出す夜目の「御雀」をわいたことによる。この町名の前は「山辺小路」と呼ばれた。
- 【おかちまち】**  
武士は職分により住居地が定められ、城の北にあたる通りの両側には武士屋敷が軒を連ねていた。数少ない武家住宅(高橋家住宅)(市重要文化財)が保存公開されている。
- 【かじまち】**  
町人町・東町の南端から山家へ通じる枝町名。「信濃筆記」に「家数二十軒、町幅三間、番川屋敷町に同じ。中比路町と云い、今山家小路といふ」とある。享保年代ころは山家小路と呼ばれていたが、江戸時代後期には鍛冶町の名称が定着した。
- 【かたは(まち)】**  
総堀の外に武家屋敷地で、東側のみ屋敷割られたためこの名がつけられた。現在、堀にかかる深志橋、かつては赤い手摺に黒い欄の威容堂を飾った古風な橋があった。桜の名所でもある。
- 【かんのこうじ】**  
町人町・本町五丁目から東に入ると天神の社が見えた。小笠原康政時代には京都右近に模した天神馬場が設けられた。明治時代には小料理屋が軒を連ねてきた。現在は小料理屋などが多い街並みである。

- 【きたは(まち)】**  
城下三馬場の一つで、総堀北側に騎馬修練が行われていたため町名となる。東の入口に番所がおかれていた。堀の太く下に「北馬場堀の井戸」がある。「信濃の国」を作った浅井源次郎が堀の北側にあった。
- 【こいけまち】**  
町人町・中町の枝町。慶長18年(1613)小笠原康政が飯田より入部した際、南半分を奉公人の屋敷にした。町名(軍事学法)の達人小池善之丞の名からとも、この辺りに小さな池があったともいわれる。紺屋、絹屋などが多かった。
- 【じょうしみず】**  
この地は、中世には市が立ち「市辻」と呼ばれにぎわっていた。小笠原氏による城下整備の際に清水の湧き回りから石の地蔵尊が出土したという。地蔵尊は縁起物の生安寺まつられている。
- 【しもよこたちまち】**  
町人町・東町の北に枝・枝町。成り立ちは天正13年(1585)頃のさい町。由来は清水が湧き出たからも、食品と衆とい人が住んでいたからともいわれる。家数も多く職人町として栄えた。
- 【しょうあんじこうじ】**  
本町から東へ入る小路で、生安寺を見通すことができた。節供のひな人形を売る店が軒を連ねたので、ひな小路とも呼ばれた。現在は「高砂通り」とも呼ばれ、人形店が多い。
- 【しんまち】**  
寛永10年(1633)に入城の松平直政が北門から北に城外付屋敷を造り、当時最も新しい町だったためつけられた。かつては総堀に注ぐ湧き水の深志大池があり、町の南にあたる「北門大井戸」は今でも地元で使われている。
- 【だみょうちよう】**  
水野氏時代では大手南通りと呼ばれた。女鳥羽川から北側の三の丸は、上級武士が居住する地域で、女鳥羽川の両側には年寄や頼朝など高橋の藩士の居住する所だったので、この名がつけられた。明治以降はオフィス街として発展した。
- 【たかじょうまち】**  
松本城の西北で城外武家屋敷の一町名。慶安年間(1648~52)に町割りが行われ、後の戸田氏時代に鷹匠屋敷がわかれたのでこの名がつけられたという。
- 【たまち】**  
大門口の左岸の低湿地で水田だったところに、慶安年間(1648~52)水野氏により城外武家屋敷が設けられた。今も1648~52水野氏により城外武家屋敷が設けられた。今も1648~52水野氏により城外武家屋敷が設けられた。今も1648~52水野氏により城外武家屋敷が設けられた。
- 【てんじんこうじ】**  
町人町・本町五丁目から東に入ると天神の社が見えた。小笠原康政時代には京都右近に模した天神馬場が設けられた。明治時代には小料理屋が軒を連ねてきた。現在は小料理屋などが多い街並みである。

- 【てんばくちよう】**  
この町の天台社は、天正年間(1573~92)に入城した石川正成が、城の隅隅除けとして出身地岡崎より勧誘したという伝承がある。水野氏の時代に城外武家屋敷が造られ、社をちなむこの町となった。
- 【どいり(まち)】**  
この地のこの名がつけられた。中級武士の屋敷が並んでいた。
- 【どうしんちよう】**  
城外武家屋敷の一町名。善光寺街道沿いに同心番所がおかれていた。なお、町人町・本町から西へ入ると、同心が住んでいた「同心小路」がある。
- 【なままち】**  
城下町・親町三町の一つ。善光寺街道沿いの本町と東町の間の堀、兵衛や高酒りの店が軒を連ねていた。天保3年(1832)犀川通船開通の頃は、塩・問屋などが増えた。現在はなままじの「蔵のまち」となっている。
- 【なむた】**  
城下町整備の際に女鳥羽川の流れを変えた時に、松本町の「堀」のひな人形を売る店が軒を連ねたので、ひな小路とも呼ばれた。現在は町屋風の賣店が並び、四社神社の社町としてにぎわっている。
- 【なままち】**  
善光寺街道沿いの北に武家屋敷地で、旗人や物資を運ぶ中馬が行き交う道であった。道の左右に軒を連ねて、侍屋敷を並べたのでこの名がつけられた。ゆがみ町の名は今に伝えられている。
- 【はくろまち】**  
町人町・本町の枝町で、城下の南出入り口のため十王堂がおかれた。古くは賣馬を集めた所で「馬市」も行われた。馬市が馬喰町といわれ、元禄6年(1693)に博労町と改められた。
- 【ひがしまち】**  
城下町・親町三町の一つで城の東側にあたる。善光寺街道に沿って木賃宿や商人・定宿屋が並ぶ旅館があり、宿場町として栄えた。
- 【ひととばしこうじ】**  
松本市はが資料館の西の通り、中町から一ツ橋に通じる小路で、雲村町といくがにになっている。古くから商店でにぎわい、藩御用達の商人は、ここから東門を通って城内へ入ったという。
- 【ふくらまち】**  
水野忠康の時代に造られた城外付屋敷で、江戸末期には60石以上の通の東に松本五十五連隊の兵営がおかれた。町名は軍旗の旭日旗と東方の旭日とをかけて扇町とした。
- 【ほんまち】**  
町人町・親町三町の一つ。善光寺街道に沿って城下の中心地として築城の頃に造られた。大手橋から袖置橋までの一丁目から五丁目までをい。各種問屋が軒を連ねた荷物の集積地であり、経済の中心であった。

- 【はろけうじこうじ】**  
旧中町上ノ丁から本町の山門にいたる参道だった。「貞享義民騒動」の多田助平蔵(1338~42)に守護神として宮村の氏に祀ったという伝承がある。江戸初期の町割りによる奉公人や職人などが多く住んでいた。
- 【みやむらまち】**  
町人町・中町の枝町。南側に宮村大明神があり、信濃守護小笠原貞宗が暦応年間(1338~42)に守護神として宮村の氏に祀ったという伝承がある。江戸初期の町割りによる奉公人や職人などが多く住んでいた。
- 【やすはらまち】**  
町人町・東町の枝町。古くは安佐郡野(農業野原)と呼ばれていた。小笠原貞康が天正10年(1582)に深志城を築いて「松本城」と改め、同13年に町割りを「安佐郡野原」の前後2字をとって安原町と名づけた。
- 【やなぎまち】**  
往古、この辺りを尾町といった。小笠原貞康が天正13年(1585)から15年にかけて城の町割りを、この地に侍屋敷を建てた。町名は柳の木が多かったことによる。明治以降は大柳町と呼ばれた。
- 【ろく(まち)】**  
城外武家屋敷の一町名。大手門前から女鳥羽川北側に東西に伸びる町。4代目松平氏がこの地に54藩分の屋敷を建てたことから、「五十間立丸かた方ナリ」として名づけられた。明治からは商店街としてにぎわった。

## 明治初期から昭和初期にかけての町名

- 【あがたち】**  
黒の宮や古代の遺跡があるので筑摩の県があったと推定され、町名は筑摩の県にちなむ。大正9年(1920)松本高等学校が創設された町名がつけられた。重要文化財の校舎は市民の教育文化活動に活用されている。
- 【あさひまち】**  
明治22年(1889)、和泉町の北に第二線路が開通し、明治41年にはこの通の東に松本五十五連隊の兵営がおかれた。町名は軍旗の旭日旗と東方の旭日とをかけて扇町とした。
- 【ありがさき】**  
鐘撞の名は中世から、阿礼と表された。「阿礼」は村を表す古語で、神が降臨する意味もあるという。町名は、盆地を見守る突壁の山を意味する。町名は松本市の西部、城山公園・アルプス公園を含む広範囲にわたる。
- 【いままち】**  
江戸時代中期に成立したといわれ、白坂村に属していた。由来は、城下町割りの外であったが城下と糸川川を結ぶ千国街道の起点で、「村落ちれども」を意味する。
- 【ほんまち】**  
長久町から、大正8年(1919)に開設した長野県工業試験場正門までの道路に沿う町名。菅原道真(菅公)まつる深志町の宮本であるので、橋をたてた真になみ橋と町名を付した。
- 【うめがえちよう】**  
長久町から、大正8年(1919)に開設した長野県工業試験場正門までの道路に沿う町名。菅原道真(菅公)まつる深志町の宮本であるので、橋をたてた真になみ橋と町名を付した。

## 明治以降の新しい町

### ■城下町から近代都市への変革

明治維新は激動期でした。廃藩置県により松本藩は松本県から筑摩県、長野県へと、わずかな間に大きな動きがありました。城郭の破却や堀の埋め立て、廃仏毀釈による寺の廃止や火災などもあり、城下町の姿は一変しました。一方、郵便・電信電話や交通手段の発達、蚕糸業の発展などから新しい町が広がり、松本城下町は近代都市への歩みを始めます。

### ■天守は残った!

明治4年(1871)の廃藩置県により不要となった城郭は、櫓や門などは破却、翌年には松本城天守が錠壳にかけられ、235両で落札されました。下横田町副町長であった市川量造は博覧会開催の建言を提出して、天守を産業振興のために活用しようと有志と奔走、本丸広場を会場に開催し、その収入で天守を買い戻しました。市川らの将来を見据えたのできことは、現在の松本にとって特筆すべきことでした。



市川量造

寺となった戸田家菩提寺全久院跡に開智学校が開校し、明治9年(1876)には文明開化の象徴である擬洋風建築の校舎が完成し、のちに西側数町の「開智町」と命名されました。昭和39年(1964)に開智小学校が新築移転し、国重要文化財開智学校校舎も移転復元されると、「開智」町は移転先の町名となり親しまれる。

### ■「商都」蚕糸のまち

松本周辺は、すでに江戸時代末期には養蚕・製糸が盛んでした。明治23年(1890)に片倉清水製糸場が設立されると、片倉を中核とした蚕糸業(機械製糸)の発展により、日ノ出町・蚕玉町などの新たな町ができました。明治35年(1902)の鉄道開通と松本駅前周辺



新松本商業学校

の整備は、蚕糸業の繁栄をさらに促進し新しい商都が形成され、「商都松本」は隆盛を極めました。片倉初代所長の今井五介は、日本銀行松本支店の誘致や信濃鉄道(JR大糸線)の経営など松本の経済発展・教育などにも大きく貢献しました。

### ■松本のまちは、屋根のないまこと博物館

城下町松本は、近代を迎えて約150年のあいだ、都市の近代化と時代の流れのなかで、有形・無形を問わず、多くの宝物を失ってしまいました。しかし、城下町らしさをこす「町割り」とその「町名」は、今でもほぼそのままです。町のあちこちにたつ「旧町名標識」(旧町名碑)には、かつての町の由来や状況が記され、これを目にすると、積み重ねられた歴史の重さを感じることできます。「住居表示に関する法律」(昭和37年)により新町名一住居表示一となってからも、「旧町名」は長いあいだ使われ、生きてきた身近な文化財―松本まるごと博物館の大切な「たからもの」―といえます。

### ■「開智町」

明治3年(1870)の廃仏毀釈で、164寺のうち124寺が廃寺となりました。町のあちこちにたつ「旧町名標識」(旧町名碑)には、かつての町の由来や状況が記され、これを目にすると、積み重ねられた歴史の重さを感じることできます。「住居表示に関する法律」(昭和37年)により新町名一住居表示一となってからも、「旧町名」は長いあいだ使われ、生きてきた身近な文化財―松本まるごと博物館の大切な「たからもの」―といえます。



新築当時の開智学校

### ■松本のまちは、屋根のないまこと博物館

城下町松本は、近代を迎えて約150年のあいだ、都市の近代化と時代の流れのなかで、有形・無形を問わず、多くの宝物を失ってしまいました。しかし、城下町らしさをこす「町割り」とその「町名」は、今でもほぼそのままです。町のあちこちにたつ「旧町名標識」(旧町名碑)には、かつての町の由来や状況が記され、これを目にすると、積み重ねられた歴史の重さを感じることできます。「住居表示に関する法律」(昭和37年)により新町名一住居表示一となってからも、「旧町名」は長いあいだ使われ、生きてきた身近な文化財―松本まるごと博物館の大切な「たからもの」―といえます。

### ■松本のまちは、屋根のないまこと博物館

城下町松本は、近代を迎えて約150年のあいだ、都市の近代化と時代の流れのなかで、有形・無形を問わず、多くの宝物を失ってしまいました。しかし、城下町らしさをこす「町割り」とその「町名」は、今でもほぼそのままです。町のあちこちにたつ「旧町名標識」(旧町名碑)には、かつての町の由来や状況が記され、これを目にすると、積み重ねられた歴史の重さを感じることできます。「住居表示に関する法律」(昭和37年)により新町名一住居表示一となってからも、「旧町名」は長いあいだ使われ、生きてきた身近な文化財―松本まるごと博物館の大切な「たからもの」―といえます。

URL: http://www.matsumoto-haku.com/  
E-mail: matsumoto@city.matsumoto.lg.jp  
TEL: 0263-32-0133 FAX: 0263-32-8974  
〒390-0873 松本市丸の内4番1号  
日曜 第二階 午後2時28分~5時  
月曜 第一階 午後2時28分~5時  
協力/松本のまちをくを考える女の101人会議  
編集・発行/松本市立博物館



- 【にしがし】**  
明治以降の発展にともない、旧城下町の内外に形成された町々の一つ。旧城下の本町、博労町から西に、犀川沿いに形づくられたためこの名がつけられたという。
- 【にしごちよう】**  
松本駅の開業と周辺地区の発展にともない形成された町々の一つ。旧城下町本町五丁目の西側のため、この名がつけられた。
- 【はなさきまち】**  
昔は東町の越後の街で、料理屋が軒を並べていた。通りの両側には桜や梅の木が植えられていて、花咲町と呼ばれていた。町割りになってからも、地元の人たちは「花咲町」に愛着を持っていた。
- 【はらうえ】**  
堀の上は、近世市内の西半分を占めていた。川の土砂や堆積によりつくられた階段状の地形を模した、田川によってつくられた土地。近年整備が行われた松本駅阿部の川沿いの一帯。
- 【ひのてちよう】**  
明治23年(1890)片倉橋が松本製糸工場を開設した。その日本製の製糸業は日中の勢いで世界へ進出した。その勢いにあやかり、松本市の東に位置し、日の出を拝する町の意味で名づけられた。
- 【みやぶち】**  
大正9年(1920)、松本高等学校本館が竣工し、これにより本町が川が合流する低湿地帯であり、山崩れが頻発していたことによること、二つ原因ともあり、古くから人が住んでいたと思われる。
- 【もともち】**  
地名は古代、信濃国府が筑摩郡にあつた時代の集落の中心部がこの辺りといふことからつけられたという。しかし、国府の位置はまだかかっている。
- 【やよいちよう】**  
大正9年(1920)、松本高等学校本館が竣工し、これにより本町が川が合流する低湿地帯であり、山崩れが頻発していたことによること、二つ原因ともあり、古くから人が住んでいたと思われる。
- 【よしちよう】**  
東町から桜町までの新道は大正末期に開かれた。大正11年(1922)に単行歩への道路・扇町が整備され、大正13年には作左衛門小路が整備された。町名はこの辺りに段が深くなったことによる。
- 【よつや】**  
明治時代に桑畑が多く、4軒の家があったとら五丁の家と呼ばれていた。明治42年(1908)、農林省農業試験場松本出張所の開設により桑畑が開墾し町名が形成された。この後、四ツ宮と改められた。
- 【なごき】**  
地は奈良井、田川、大門沢川などが流れ、地湧き水がたまたま湧き出たところから、この町には125か所の湧き水が湧き出ている。64か所について説明してある。これらの説明は、松本市教育委員会文化財課が作成した「旧町名標識一覧表(あいうえお)」には記載された。また、読みの付「まち」は「ちよう」との一覧表を参考にされた。